古代三田の地名

飛鳥・奈良時代から平安時代の前半に区分される、古代の三田市域の様子を示す資料はあまり見つかっていません。当時の地名に関する記録も多くはなく、しかも残された記録は奈良時代の後半以降のものに限られます。その上、伝えられた地名の中には、現在の位置を特定できないものも少なくありません。そのような中で、市域に含まれる可能性が高い地名としては、三田地区の貴志(きし)、三輪地区から高平地区にかけての松山(まつやま)、鹿舌(したはつか)、羽束(はつか)、川原(かわら)、広野地区から藍地区にかけての布久呂布山(ふくろう)、阿井(あい)、比介坂(ひけさか)などをあげることができます。

これらの地名をみると、おおむね二種類に分けることができます。すなわち、ひとつはキシ・フクロウ(山)・アイ・ヒケ(坂)のように、当時の言葉に漢字の音をあてたと考えられるグループで、当時の人々の話し言葉が漢字で記録されて伝えられた可能性が高い地名です。もうひとつは、松の山・鹿の舌・羽の束(はねつか)・川の原のように漢字のもつ意味をもってその土地の特徴や景観を表した言葉が地名になったと考えられるグループです。

日出坂の風景(藍地区)

これら古代の地名の由来には興味深いものがありますが、大半の地名は、現在では漢字のあて方(表記)が変わっています。つまり地名の表記は時代により変わるものであり、その由来を考える際には、現代の漢字表記にとらわれてはいけないのです。また元々地名は、その土地を特定する必要のために名付けられたものであり、当時の人々にとって意味をもつ言葉に基づくものであったという前提でその由来を考える必要もあります。

このように地名には、それを名付けた先人たちの地域に対する見方を現在に伝える文化遺産としての価値があります。古き地名の由来を尋ねるとともに、新しい地名についてもその由来やそこに込められた新しいまちづくりへの思いを後世に伝えることもまた、地域の文化伝承活動として意義のあることではないでしょうか。

生涯学習支援課 市史編さん担当